

[公演ノート]

## Marble Concert

—芸術学部教員による演奏会— 報告

### A Report on the Marble Concert by College of Arts Faculty

馬場眞二

Shinji Baba

〈抄 録〉

2018年9月16日（日）に玉川大学 University Concert Hall 2016 Marble Hallにて開催された、芸術学部教員による演奏会～中田喜直による日本歌曲演奏会～の報告として、美しい響きの Marble Hall に於いて中田喜直の歌曲演奏に対する取り組みを述べたものである。

キーワード：ベルカント、日本歌曲、中田喜直、昭和22年

#### Abstract

This is a report of the concert by the Faculty of the College of Arts held on Sept. 16<sup>th</sup>, 2018, in Marble Hall at Tamagawa University's University Concert Hall 2016, which featured performances of Japanese songs by Yoshinao Nakada, and the report describes the performances that sounded beautifully in the Marble Hall.

Keywords: bel canto, Japanese songs, Yoshinao Nakada, Showa 22

## 1. はじめに

2018年9月16日（日）に玉川大学 University Concert Hall 2016 Marble Hallにて、中田喜直（1923-2000）自身が「歌曲の年」と書き記した昭和22年に作曲された独唱用歌曲と、昭和39年に初演された二重唱による歌曲集「木の匙」という、中田喜直作品に特化した演奏会を開催した。

2016年秋に竣工した Marble Hall は非常に美しい響きを持ったホールであり、所蔵する演奏会用ピアノも、スタインウェイ、ベーゼンドルファー・インペリアルと素晴らしいものである。声楽家としては、Marble Hall のベーゼンドルファー・インペリアルは声との馴染みが特に良く、歌い手を助け

てくれるピアノであるということは早くから気付いていた。しかし通常行われる演奏会は、ピアノ独奏や声楽、楽器独奏等、プログラム構成上スタインウェイが使用されることが多く、ベーゼンドルファーを単独で伴奏に使用する演奏会は皆無と言って良い状況であった。

かねてより研究し続けていた中田喜直歌曲の魅力を引き出すには最適なホールとピアノが身近にあるということもあり、また学生の西洋音楽指向により日本歌曲がなおざりになっていることを何とかしたいという状況もあり、中田喜直作品による日本歌曲の演奏会が開催出来ないものかと思っていた。平成28年度から「FYE音楽Ⅰ、Ⅱ」(8学部17学科の1年生全員が必修科目としているものである。『愛吟集』や『第九』を主な教材とし、音楽における表現方法から音楽の歴史、様式などを幅広く学ぶことを目的とする。)を担当頂いている教育学部の佐藤恵利先生とは、日本オペラ協会において故大賀寛総監督の下、オペラ出演やコンサート共演等で旧知の間柄であり、演奏会開催意図をご相談したところ快諾頂けた。伴奏には外部オペラ団体でも活躍中の実技指導員奥田和先生に共演者としてご協力頂くことが出来て演奏会が実現することとなった。

また、ホールの使用に関して小佐野圭学科主任のご尽力により、芸術学部主催としての開催となった。

## 2. 演奏会の目的と概要

### 2.1 目的

主に芸術学部学生を対象として、現役教員による実演を通して学生自身の演奏に必要な技術について知識を得る機会とする。今回は声楽を履修する学生にとって必須とも言うべき日本語による歌曲演奏に関して、中田喜直の創作意欲が最も旺盛で充実した時期の曲目を取り上げ、日本語の歌曲についての発音発声方法を知ることが第一の目的である。加えて、2016年に竣工した美しい響きを持ったコンサートホールを、学外一般に向けて公開する機会とするのも目的とする。

### 2.2 概要

演奏会告知フライヤー(図1)、演奏会概要をまとめたものを示す(表1)



(図1) Marble Concert告知フライヤー

(表1) 演奏会概要

Marble Concert —芸術学部教員による演奏会— 中田喜直による日本歌曲演奏会	日時：2018年9月16日（日） 16：30開場 17：00開演 場所：玉川大学 University Concert Hall 2016 Marble Hall 入場無料（全席自由）
バリトン	馬場眞二
ソプラノ	佐藤恵利
ピアノ伴奏	奥田和
主催	玉川大学芸術学部

### 3. 演奏会の内容

#### 3.1 演奏曲目としての日本歌曲選曲について

2000年4月、東京二期会の研究活動推奨事業としてスタートした日本歌曲研究会に筆者は発足当時より参加し、日本歌曲演奏上での解釈と客席に伝わる日本語による奏法について研究を行ってきた。並行して、日本オペラ協会にも所属し、舞台における日本語発音発声法の実践として、オーケストラ伴奏によるオペラにおける日本語発声法研究にも取り組んできた。特にここ10年ほどは、芸術歌曲としての日本歌曲における詩の解釈と、それぞれの作品に求められる言語表現方法の違いに着目して、小～中規模ホールでの演奏会において日本語を客席に正しく伝える歌曲演奏法の研究実践を行っている。

#### 3.2 プログラム

今回のプログラム選曲に当たっては全てを中田喜直氏による作品に限定した上で全体を2部構成とし、前半は中田氏自身が「歌曲の年」と呼んでいた昭和22年の作品から選択した。共演者の佐藤恵利先生には、「六つの子供の歌」から単独で歌われることの多い2曲をお願いした。後半は芸術的にも優れた組作品であり単独として演奏されることの多い「木の匙」全曲を演奏した。演奏曲目は以下の通り。

#### Program

またあるときは（三好達治 詩） 中田喜直  
髭の上（三好達治 詩） 中田喜直  
木兎（三好達治 詩） 中田喜直

六つの子供の歌 より

- ・たあんき ぼーんき（山村暮鳥 詩） 中田喜直
- ・おやすみ（三木露風 詩） 中田喜直

「海四章」（三好達治 詩） 中田喜直

1 馬車

- 2 蝉
- 3 沙上
- 4 わが耳は

## 休憩

二人のモノローグによる歌曲集

「木の匙」(寺山修司 詩) 中田喜直

- I 小さな五つの歌
- II テーブルについて
- III つぶやき
- IV 愛について
- V 生活について
- VI やがて生まれてくる子の子守唄
- VII 城砦
- VIII 妻の童話
- IX 夏がくると
- X 悲しくなったときは
- XI 世界

### 3.3 プログラムノート

University Concert Hallにおける演奏曲目についてのプログラムノートは下記の通りである。

#### Program note

《またある時は》(三好達治 詩) 中田喜直

この詩は三好達治が妻智恵子と1月に協議離婚した昭和18年の年末から翌19年にかけて湯ヶ島、伊東等に滞在した間に執筆され、萩原朔太郎の妹アイと結婚した直後の昭和19年6月に青磁社から出版された『花筐(はながたみ)』に収められている。七五調の詩に作曲されており、個人的見解ではあるが、同詩集に収められ同時期に作曲された《すずしきうなじ》と対をなすものと考えている。

《甃の上》(三好達治 詩) 中田喜直

この詩は三好達治が病気の萩原朔太郎に代わって明治大学文芸科に出講し始めた昭和16年に出版された『一点鐘』に収められている。特に変哲も無いように思える「翳りなきみ寺の春」の情景であるが、「をみなご」が「語らひあゆみ」し、「瞳をあげて」「翳りなきみ寺の春をすぎゆく」その見ている先にあるものが「み寺の薨みどりにうるほひ」「廂々に風鐸のすがたしづか」と言うことである。そして「ひとりなるわが身の影をあゆます」と言うことは、「ひとりなるわが身をあゆます」のではなく、「影」を介在させることで第三者もがその「甃の上」において追体験することが可能になると言える。

《木兎》(三好達治 詩) 中田喜直

この詩は《甃の上》と同じく昭和16年に出版された『一点鐘』に収められている。かつて住んでいた都(街)に戻り、そこで昔と変わらない木兎の鳴き声を聞き、自らの過ごしてきた十年の時に想いをはせる、と読み取れる詩である。学生時代に初めてこの詩を読んだ時に三好達治について習ったのは以下のようなことだった。昭和2年に萩原朔太郎と知遇を得て馬込の借家に同居した折りに朔太

郎の妹アイに一目惚れして求婚、両親の反対にあった後に就職し婚約したものの会社が倒産し萩原家に破談を宣告された。その後、佐藤智恵子（佐藤春夫の姪）と昭和9年1月に結婚し昭和18年11月に離婚、萩原アイとは昭和19年5月に結婚し昭和20年2月離婚しており、その過ごしてきた年月を書いたものと習いそのまま信じていた。日本歌曲の演奏を行うようになって再度読み返してみた折りに、年表を見て疑問を抱いた。『一点鐘』の前書きや発刊後に数々の戦争詩を発表して戦争邁進に突き進んだ事実や、家計を考えた上での選択とは言え、大正4年に15歳で大阪陸軍地方幼年学校に入学し、大正10年21歳で退学するまで陸軍士官学校に在籍していたことは何らかの意味があるのではないかと思えてならない。中田喜直氏の作曲したこの曲は、「海四章」と共に畑中良輔氏の独唱会で初演され、現在ではバリトン以外の声種でも歌われる非常にポピュラーな曲となっている。

「六つの子供の歌」より 中田喜直

- ・たあんき ぼーんき（山村暮鳥 詩）
- ・おやすみ（三木露風 詩）

ソプラノの佐藤恵利先生に共演して頂くにあたり昭和22年作曲の「六つの子供の歌」の演奏をお願いした。全曲の演奏をお願いしたかったが、演奏会が長大になってしまう為、明るい曲調の《たあんき ぼーんき》と単独で演奏されることも多い《おやすみ》の演奏をお願いした。「六つの子供の歌」は昭和2年発行の『小学校全集（西條八十編・日本童謡集）』から取った詩に作曲され、柴田南雄氏、入江義郎氏、石桁真礼生氏、別宮貞雄氏らと結成していた「新声会」と言う作曲グループで畑中更子氏により初演発表された。

「海四章」（三好達治 詩）中田喜直

※「海四章」は昨年開催したりサイトルでも演奏した曲目であり昨年の公演ノートより転載する。

「海四章」は1941年に発表された三好達治の詩集『一点鐘』に収められており「馬車、蝉、沙上、わが耳は」の4篇に中田喜直が曲を付けて、1947年にバリトン歌手畑中良輔氏の最初のリサイトルで初演された。「海四章」に取り入れられた詩は全て三好達治が小田原に住んでいた頃に作られたもので、朝夕に海を眺めていた中で、目の前に広がる風景に自身の失われた時間、孤独感などを持っている曲である。

第1曲《馬車》は五・七調の韻律を基に書かれており、「五・七、五・七、五、五／五・七、五・七、五、五」の韻律を活かした作曲がなされている。

第2曲《蝉》は全体を五・七調に統一し「五・七、五・七、五・七、五・七／五・七、五・七、五・七、五・七」となっている。

第3曲《沙上》は「五・七、五・七、五・七、五・七／五・七、五・七、五・七、五・七／五・七、五・七、五・七、五・七／五・七、五・七、五・七」となっている。

第4曲《わが耳は》は「五／五・七／五／七」となっている。

二人のモノローグによる歌曲集

「木の匙」（寺山修司 詩）中田喜直

- I 小さな五つの歌
- II テーブルについて
- III つぶやき

- IV 愛について
- V 生活について
- VI やがて生まれてくる子のための子守唄
- VII 城砦
- VIII 妻の童話
- IX 夏がくると
- X 悲しくなったときは
- XI 世界

二人のモノローグによる歌曲集「木の匙」は、当時朝日放送東京支社音楽プロデューサーであった日下部吉彦（1927-2017）の企画で、1964年第19回芸術祭参加作品として、朝日放送の委嘱作品として作曲された。その企画意図を要約すると、「日本には優れた歌曲はたくさんあるが、歌曲集となると非常に少なくなってしまう。広く国民に愛され親しまれるような歌曲集を作りたい。」ということであった。当時の中田喜直も、シューマンの「詩人の恋」のような曲の現代版を書きたいと思っており、詩の内容や、スタイル、感覚が寺山修司の考えと一致し、大きな共感をもって作曲することが出来たとのことである。

詩の内容について寺山修司の“詩人のノート”には次のように書かれている。

「これは結婚をテーマにし、若い夫と妻とが一つの生活を作り上げてゆく過程を、それぞれのモノローグ体の「歌」によって構成した組詩です。単に、夫と妻と、家具什器と二、三匹の家畜とから始められた「家」が、しだいに世界の始まりと終りとを内包した形而上的なものとして根を下ろしてゆくまでをまとめてみようと思図しました。」

初演は1964年11月22日に、ソプラノ：伊藤京子、バリトン：立川澄人、ピアノ：三浦洋一、演出：日下部吉彦によって行われ、朝日放送で放送された。初演以後、元々組歌として作られたものであり、その内容も劇的である為「小さなオペラ」として演技をつけて演奏されることも多い。また全曲演奏のみで無く、それぞれの曲が単独で演奏される機会も多い作品である。

#### I 《小さな五つの歌》

ヨーロッパの多くの地方では、子どもが産まれて行く洗礼式にあわせてスプーンを贈るという古くからの慣習がある。現代は銀のスプーンを贈ることが殆どだが、19世紀半ば以前は、富裕層は魔を払う銀の匙、庶民は木の匙を贈っていた。これを昭和30年代の日本の庶民夫婦に置き換えて木の匙をテーマにしたと思われる。夫婦生活を始める新天地を定め、隣町まで“小さな古い木の匙”を買いに行く。この木の匙こそが二人の約束であり、夢でもあるこれから生まれてくるであろう家族を象徴するものとして描かれている。

#### II 《テーブルについて》

新生活を始めた家庭の中心であるテーブル。木のように大地と繋がっているかのようなテーブル。そこはいつも豊かに広がっている。そのテーブルをいつも食事で充たすのは妻の役目。「テーブルにやがて子供を实らせましょう それはふたりの約束だから、それはふたりの夢だから」と、二人の夢を描く。

#### III 《つぶやき》

夫の仕事着を黙々と縫い上げていく妻の日常における独り言。縫っている状況を表現していると推測出来る伴奏に乗せて、夫の仕事着を手縫いするその先に、二人のこれからの新生活に向けての夢と

希望がみえる。

#### IV 《愛について》

一つ屋根の下で夫婦として暮らす日々。静かに本を読んでいる夜更けにふと聞こえてきた二階を歩く妻の足音。本を閉じ階下を歩いてみる。夫はそんな何気ない足音でも二人が響きあっているのだと実感する。

#### V 《生活について》

響きあえていると思っては居ても、暮らしていると見えてくるほんの小さなすれ違い。「そんな妻のかなしみなんて、さっさと洗濯機で洗ってしまえばいいのさ。」と歌う夫の心ないつぶやき。

#### VI 《やがて生まれてくる子のための子守唄》

これから生まれてくる我が子のために妻が歌う子守唄。ゆりかごを買って帰る様子、何気ない日常の情景など、その胎内で育む子どもの誕生を心待ちにし、母となっていく妻の気持ちが歌われている。

#### VII 《城砦》

いつも妻とは響きあっていると信じていた。いつも妻がいるから、いつも気がつかない。いつも妻は家のどこかにいて、いつも妻は消える。そして永遠に続くかと思われるような平凡な日々の繰り返し。13回も繰り返される「いつも」という言葉、変わらないようであるが何か変わっている。「妻よ、悲しき家の亡霊よ。僕はふとこの静けさが怖い」と夫が歌う。

#### VIII 《妻の童話》

平凡な日々が繰り返されるなか、突拍子もなく妻が歌うユーモラスな童話。

#### IX 《夏がくると》

夏がくると妻を置いて独りで旅に出たくなる。愛しているのだけれど、どこか遠くへ行きたくなる。心のなかで海が荒れていても口に出さない…出せない男の心境を歌う。

#### X 《悲しくなったときは》

単独で歌われること非常に多い曲。この曲のみ初版出版以来第8刷までは声種の指定がなかった。学生時代に「母なる海」というイメージからの連想や「古本屋には女性は行かない」等という勝手な思い込みから、これは男性が歌うべき曲なのではないかという考えにとらわれていた。しかし寺山修司の詩を読んでも「海」が宇宙のように不変な世界の象徴として頻繁に登場している。この曲の中でも「海だけは終わらないのだ」と、海というその大きな絶対的存在に触れることで、人生のなかで辛く悲しいときも心洗われると歌っている。男の勝手な思い込みや我がままでも「あなたが病気なら」と言うことで、この世界そのものを諦観しているのではないかと思ひ至り、やはりソプラノによって歌われるべきだと実感した。

#### XI 《世界》

木枯らしが吹く10月の夜更け。母となる日の近い妻はその存在すら宇宙のように、そして人間の歴史そのもののように椅子から動かない。

## 4. まとめ

私の思いつきから始まったMarble Concert Hallでの演奏会が、周囲の方々の協力を得て形になったことはこの上ない幸せであった。特に故大賀寛氏の下で共に日本歌曲の研修を行っていた佐藤恵利先生、外部団体でのオペラ公演等で支えて下さっている奥田和先生の共演を得られたことがこの演奏会開催に大きな力となった。このような美しい響きを持ったホールと素晴らしいピアノを使用した演奏会開催に向けてご尽力下さった小佐野圭学科主任、小山正学部長にも感謝したいと思う。

今回の演奏会は中田喜直作品のみという、大変研究発表的要素の強いものではあったが、Marble Concert Hallの美しい響きを活かして日本語を伝えるという点では、中田喜直作品は最適であったと思われる。

#### 参考文献

- 中田喜直『中田喜直 歌曲集』上野一郎 編、河合楽器製作所・出版事業部 1975年 新第1刷  
中田喜直『中田喜直 歌曲集』上野一郎 編、河合楽器製作所・出版事業部 1983年 第13刷  
中田喜直『二人のモノローグによる歌曲集 木の匙』音楽之友社 1971年 第1刷  
中田喜直『二人のモノローグによる歌曲集 木の匙』音楽之友社 1980年 第2刷  
中田喜直『二人のモノローグによる歌曲集 木の匙』音楽之友社 1999年 第9刷  
三好達治『世界の詩26 三好達治詩集』谷川俊太郎編 彌生書房 1984年 第16版  
三好達治『測量船』講談社 1996年 第1刷  
三好達治『一点鐘』創元社 1944年 初版  
三好達治『花筐』札幌青磁社 1946年 第3刷